

養育者が持つ育児感情と対処行動の関連

吉田恵三¹・岡本祐子¹

The relationship between parents' feelings in rearing and coping

Keizo Yoshida¹ and Yuko Okamoto¹

The purpose of this study was to examine the relationship between parents' feelings in rearing and coping. This study was based on a stress model (Folkman & Lazarus, 1988). 151 mothers completed five kinds of questionnaires that measured their parenting feelings in rearing, coping and so on. Coping was considered as perimeter between negative feelings and positive feelings in this study. The results were as follows; (1) avoidance coping was negative relations between positive feelings and (2) solution coping and recreation coping were positive relations between positive feelings. In particular, solution coping was a strong positive relation between positive feelings when feeling anxious about parenting style. Besides recreation coping was a strong positive relation between positive feelings when feeling anxious about children's development. This result suggests that the controllability of stressor influences affects coping.

Key words: affirmative feelings, negative feelings, coping

問題と目的

昨今子ども虐待や育児ノイローゼが深刻化している。子ども虐待も年々増加の一途をたどり、2010年には虐待の発生件数が55152件となっている。この背景には、養育者の孤立や核家族化など多くの要因が指摘されており、養育者が子育てに対して抱いている感情も重要な要因の1つである(岩堂・松島, 2001; Thompson, 2004)。このような現状を踏まえると、親子の精神的健康を維持するためには、育児感情の理解が必要となるであろう。では、養育者は子育てに対して、どのような感情を抱いているのであろう。養育者からは、「子育てに疲れた」という育児への否定的感情と同時に、「育児によって成長している感じがする」という育児への肯定的感情が語られる。一見、相反する感情に見えるが、実際に育児に携わっている養育者は、育児に対してどのような感情を持っている

¹ 広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

のであろうか。

先行研究において、育児感情は次の3つの観点から捉えられている(荒牧・無藤, 2008)。1つ目は育児感情の内容を、親か子どものどちらに関連しているものかによって分類する方法である。この観点では、育児ストレス(育児否定感情)を「親側に関連するもの」と「子ども側に関連するもの」に区別する(佐藤・菅原・戸田・島・北村, 1994)。2つ目は負担の内容から分類する方法である。この枠組みでは、育児否定感情を「育児困難感」、「育児負担感」、「育児不安感」などに大別する(川井・庄司・千賀・加藤・中村・安藤・谷口・佐藤・恒次, 1999, 2000; 住田・中田, 1999)。3つ目は、育児ストレスとは別に、育児に対するポジティブな感情である育児肯定感情が存在するという観点である。荒牧・無藤(2008)は、この3つの枠組みから育児感情を分類し、住田・中田(1999)の提唱した育児感情の再分類を行った。荒牧・無藤(2008)によると、育児感情には育児否定感情と育児肯定感情があり、育児否定感情は育児負担感と育児不安感に分けることができる。育児負担感と育児不安感に対する不快感情である育児不快感や心理的な制限から生じる育児束縛感がある。育児不安感と育児負担感とは、親に関連する不安感である育て方への不安と子どもに関連する不安感の育ちへの不安に大別される。荒牧・無藤(2008)によって、育児感情には、育児に対する否定的な感情とともに肯定的な感情が存在することが実証的に示された。従来の研究においては、育児感情の中でも育児否定感情が注目される傾向にある。その理由の1つは、育児否定感情は、多くの養育者に共通の感情である一方で、それが過剰になった場合、子ども虐待や育児ノイローゼなどのリスクとなるためである(岩堂・松島, 2001)。そのため、親子の精神的健康の維持のためには、育児否定感情を低減させる必要があり、その要因の検討が行われている。しかし、育児否定感情が低いと適応的であるということは同義であろうか。菅野(2001)は、育児否定感情を抱くことが一概に不適応的であるとは言えないと指摘している。昨今では、育児否定感情とともに、育児肯定感情にも注目が集まっている。先述のように住田・中田(1999)や荒牧・無藤(2008)は育児に対する感情には、否定的感情とは別に、肯定的な感情が存在することを指摘している。育児肯定感情とは、「子どもをかわいいと感じる」こと、「育児により自身が成長していると感じる(柏木・若松, 1994)」ことである。住田(1999)は、育児肯定感情が高い場合、育児ストレスへの耐性が高いことも指摘している。育児肯定感情とは、育児の基盤となるものであり、育児ストレスを検討する際の重要な指標となると考えられる。しかし、育児肯定感について検討がなされている研究は未だに少ないのが現状である。そこで本研究では、育児肯定感に影響を与える要因について検討を行う。

現在までに否定・肯定を問わず育児感情にポジティブに影響する要因として、ソーシャルサポートを受けていること(安藤・岩藤・荒牧・無藤, 2006, 荒牧・田村, 2003; 荒牧, 2005;)や、自己効力感の高さ(金岡・藤田, 2002)などが指摘されている。しかし、日々の子育ての中で、養育者は様々な問題に直面し、子育てに対して否定的な感情を持つこともある。この否定的な感情を持った段階において、肯定的感情を持つことは少ないのではないか。つまり子育てに対して、否定的な感情を持ち続けるだけでなく、その否定的な感情を肯定的なものに変容させる要因があると考えることが妥当であると考えられる。このような悩みに直面した個人が、様々な反応を引き起こすに至るまでのプロセスを検討した代表的なモデルに Lazarus & Folkman(1984), Folkman & Lazarus(1988)のストレ

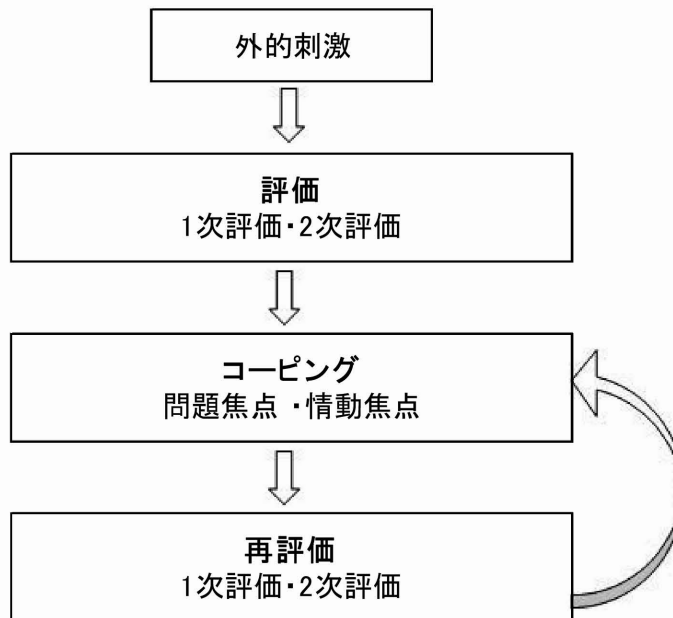


Figure 1 認知的評価モデル(Lazarus & Folkman,1984 ; Folkman & Lazarus,1988)

モデルがある。Lazarus & Folkman(1984), Folkman & Lazarus(1988)はストレスという潜在的にストレスの原因になり得る出来事に直面した個人が、抑うつや疲労などのストレス反応を生じるプロセスを心理ストレスモデルから説明を試みた(Figure1)。心理ストレスモデルではストレス反応発生までを、ある個人が①ストレスを脅威と認知するかどうか(1次評価)、②それに対処できるかの判断(2次評価)、③そして対処行動(コーピング)を行い、④再評価とコーピングを繰り返し、④その結果として反応が生じると仮定する。心理ストレスモデルの考えに基づいた研究は多くの分野で数多くなされており、ストレスモデル全体の実証的研究だけでなく、コーピングや認知過程という各要因の検討も行われている。その中でもストレス反応とコーピングに関する研究は盛んである。コーピングとは、自分にとって脅威があると認知された出来事に対して行う対処行動である。神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野(1995)によると、コーピングは「心理的ストレス反応を体験した個人が、嫌悪の程度を弱め、また問題そのものを解決するためにおこなう、さまざまな認知的・行動的試み」(p.41)である。そして同じストレス状況にある人でもコーピングの個人差がストレス反応の個人差に影響する。コーピングの分類については、多くの分類方法があり、大きく次の3つに分けることができる。Lazarus & Folkman(1984)の提唱した問題に焦点を当てるか感情に焦点を当てるかという分類、問題に積極的に関わるか回避的な行動をとるかという分類、そして関わり方が認知レベルのものなのか、行動レベルのものなのかという3軸での分類が可能となる(神村ら,1995)。主に精神的健康には、積極的コーピングがポジティブな影響を持ち、回避的コーピングがネガティブな影響を持つことが明らかとなっている(Penley, Tomaka, & Wiebe, 2002)。コーピングは、介入により拡張が可能であることから、臨床場面でも多く取り入れられている概念の1つである。多くの実証

研究の中でコーピングへの影響要因としては、自己効力感やソーシャルスキルといった個人要因とサポートのような社会的要因がある (Pierce, Sarason, & Sarason, 1996 ; 島津, 2006)。しかし、育児研究にコーピングの概念を用いたものはあまり見られない(海老原・秦野, 2004 ; 間・筒井・中嶋, 2002 ; 永田・仲道・野口・平田, 2011)。

保護者の行うコーピングと抑うつとの関連を検討した間ら(2002)によると、調整的コーピングを取る保護者の方が、逃避的コーピングを取る保護者より精神的健康は保たれていた。調整的コーピングとは、積極的に問題に取り組もうとする傾向である。逃避的コーピングは問題から離れていく傾向である。間ら(2002)により、問題に積極的に取り組む方が、ストレスが低くなる可能性が示唆された。しかし、間ら(2002)が検討したコーピング分類は関与か逃避かの区分のみで簡略化されすぎている可能性がある。コーピングには、Goodness of fit という概念(Folkman, Schaefer, & Lazarus, 1985)が存在し、ストレスとコーピングの適合を前提としている。例えば、問題焦点コーピングを行うことが有効かどうかについては、個人がストレスを統制可能と考えているかという点が重要となる。このようにストレスによって、適切なコーピングが変容することが指摘されている。つまり、回避と積極という二分ではなく、ストレスの内容とコーピングの内容に注目する必要がある。また、間ら(2002)はコーピングと抑うつとの関連の検討を行っているのみであり、育児感情そのものとの関係性の検討はなされていない。コーピングと育児感情に注目した研究として、永田ら(2011)がある。永田ら(2011)によると、育児肯定感情にポジティブな影響を与えるものは、問題解決と認知方略コーピングであり、ネガティブな影響を与えるのは、自責と回避コーピングであった。このように先行研究では、コーピングが育児感情に与える影響についての検討がなされている。しかし、コーピングが文脈つまりストレスを考慮されずに用いられている傾向がある。

上述のように Folkman & Lazarus(1988)は心理ストレスモデルの中で、評価を受けてコーピングがなされた後にもう一度評価を行うことを指摘している。そしてこの時に、否定的認知が行われなかった場合、抑うつなどのストレス反応は生じないと考えた。つまり先行研究においては、コーピングによって、育児感情に変化が生じることが検討されているものの、もう一度評価をするという点については十分な検討がなされていない。

そこで本研究においては、養育者が子育てに対して行う1次評価を育児否定感情として捉え、それに対して、どのようなコーピングを行うことが、育児に対して肯定的な評価を抱かせるに至るかの検討を行う。そのことにより、育児否定感情を育児肯定感情として再評価するプロセス理解の一助とする。なお、間ら(2002)の育児コーピング尺度は、乳幼児の保護者を対象としており、質問文も学齢期児の保護者への適応は困難であると考えられる。そのため、本研究では包括的なコーピング尺度である神村ら(1995)の尺度を使用し、育児場面におけるコーピングを検討する。

方 法

調査時期・場所及び対象者

2010年11月5日から11月16日にA県下のB市とC市の公立小学校低学年の子どもを持つ保護

者計 229 名。回収数は 196 人(回収率 86%)であり、有効回答数は 190 人(男：4 名，女：186 名)であった。保護者平均年齢は、37.15 歳 (範囲：30 歳～53 歳，SD = 3.32)。質問紙配布前に学級通信を通じて、調査の旨を保護者に伝えた後、以下の内容の質問紙を配布した。回答には 15 分程度を要した。回答後には児童，担任を経由して調査者が回収した。個人情報保護の観点から，回答後には質問紙に個別に付属した封筒へ質問紙を厳封してもらい回収後に調査者が開封をした。

質問紙の構成

①育児感情

育児感情測定には住田・中田(1999)の育児感情尺度を使用した。この尺度は，育児に伴う感情を「一般的な不快感情(5 項目)」，「子どもの成長・発達に関する不安感情(4 項目)」，「母親自身の育児能力に対する不安感情(4 項目)」，「育児束縛感(4 項目)」，「育児に関する肯定的感情(5 項目)」の 5 つに分類して測定している。回答形式は，最近 1 ヶ月間の子育てに対して感じていることを「いつもある」，「しばしばある」，「時々ある」，「あまりない」，「まったくない」5 件法とした。

②コーピング

コーピングの測定には，神村ら(1995)の Tri-axial Coping Scale24(TAC-24)を使用した。この尺度はコーピング選択の特徴を測定するために作成されたものであり，8 因子構造 24 項目から構成される(Table1)。コーピングを 3 つの軸，問題焦点－情動焦点・接近－回避・行動－認知の組み合わせによって 8 象限から捉えることを目的としている。8 象限とは，情報収集，放棄・諦め，肯定的解釈，計画立案，回避的思考，気晴らし，カタルシス，責任転嫁である(Table1)。回答形式は，「とても当てはまる」，「当てはまる」，「どちらともいえない」，「あまり当てはまらない」，「全く当てはまらない」の 5 件法である。なお本研究では，育児場面におけるコーピングの測定のため，教示文を子育てで悩んだ時の対処法を選ぶように変更した。

Table 1
TAC24 の組み合わせ

象限名	8因子の組み合わせ	略称	具体例
情報収集	関与・問題焦点・行動	EPB	既に経験した人から話を聞いて参考にする
放棄・諦め	回避・問題焦点・認知	APC	自分では手におえないと考え、放棄する
肯定的解釈	関与・情動焦点・認知	EEC	悪いことばかりではないと、楽観的に考える
計画立案	関与・問題焦点・認知	EPC	原因を検討し、どのようにしていくべきかを判断する
回避的思考	回避・情動焦点・認知	AEC	嫌なことを頭に浮かべないようにする
気晴らし	回避・問題焦点・行動	AEB	買い物や賭け事、おしゃべりなどで時間をつぶす
カタルシス	関与・情動焦点・行動	EEB	誰かに話を聞いてもらい、気を静めようとする
責任転嫁	回避・問題焦点・行動	APB	自分は悪くないと言い逃れする

Table 2
TAC-24 の因子分析結果(最尤法・Promax 回転)

	F1	F2	F3
【APC】自分では手に負えないと考え放棄する	.825	-.062	.015
【APB】責任を他の人に押し付ける	.776	-.101	.064
【APC】対処できない問題だと考え、諦める	.737	.024	-.061
【AEC】無理にでも忘れようとする	.660	.161	-.044
【APB】自分は悪くないと言い逃れする	.656	.106	.018
【APC】どうすることもできないと解決を後延ばしにする	.591	-.049	.061
【APB】口から出まかせを言って逃げ出す	.549	.065	-.021
【EEB】誰かに話を聞いてもらって冷静さを取り戻す	-.116	.752	.059
【EEB】誰かに話を聞いてもらい気を静めようとする	-.218	.728	.045
【AEB】友だちとお酒を飲んだり好物を食べたりする	.072	.658	-.094
【EEB】誰かに愚痴をこぼして気持ちをほらす	.027	.656	-.071
【AEB】買い物や賭け事、おしゃべりなどで時間を潰す	.215	.524	-.075
【AEB】スポーツや旅行などを楽しむ	.020	.486	.048
【EEC】今後良いこともあるだろうと考える	.054	.427	.020
【AEC】嫌なことを頭に思い浮かべないようにする	.177	.406	.180
【EPC】どのような対策をとるべきか綿密に考える	.052	-.171	.785
【EPC】原因を検討しどのようにしていくべきか考える	-.021	-.081	.731
【EPB】詳しい人から自分に必要な情報を収集する	.109	.177	.635
【EPB】力のある人に教えを受けて解決しようとする	-.002	.113	.475
【EPC】過ぎたことの反省をふまえて次にすべきことを考える	-.265	.130	.390
因子間相関			
F1		.242	-.151
F2			.204

③フェイス項目

年齢、性別、職業、同居人の有無及び内容

以上の尺度の他に、本研究では未解析の複数の変数が質問紙に含まれていた。分析には、PASW18 for Windows, Amos18.0 を用いた。

結 果

基礎統計量

①対象者の基本属性

回答者 196 名のうち、欠損値が無く、現代の日本の家族構成である核家族形態の女性 151 名を最終的な分析対象者とした。平均年齢は 37.86 歳(範囲：30 歳～48 歳, $SD = 3.56$)であった。

②育児感情尺度

育児感情の構造を確認するために、住田・中田(1999)の原版の分類と住田・中田(1999)を再分析した荒牧・無藤(2008)の修正版モデルの 2 つを仮定し確認的因子分析を行った。その結果、住田・中田(1999)の因子構造に比べ、荒牧・無藤(2008)の因子構造の方が、高い適合度を示した(住田・中田

Table 3

育児肯定感情を目的変数とする階層的重回帰分析(強制投入法)

	step1	step2		step1	step2		step1	step2
育児負担感	-.323 **	-.236 **	育てへの不安感	-.361 **	-.319 **	育ちへの不安感	-.227 **	-.168 *
問題回避コーピング		-.207 *	問題回避コーピング		-.168 *	問題回避コーピング		-.231 **
気晴らしコーピング		.164 *	気晴らしコーピング		.152 *	気晴らしコーピング		.173 *
解決努力コーピング		.172 *	解決努力コーピング		.188 **	解決努力コーピング		.156 *
R^2	.104	.202	R^2	.130	.234	R^2	.052	.177
ΔR^2		.097	ΔR^2		.104	ΔR^2		.126

** : $p < .01$ * : $p < .05$

モデル $GFI=.827$, $CFI=.780$, $AGFI=.855$, $RMSEA=.08$, $AIC=474.333$; 荒牧・無藤モデル $GFI=.892$, $CFI=.870$, $AGFI=.819$, $RMSEA=.08$, $AIC=272.370$ 。そのため、荒牧・無藤(2008)の因子構造である「育児負担感」、「育てへの不安感」、「育ちへの不安感」、「育児肯定感情」を採用した。信頼性を示す α 係数は.88～.70 であった。

③コーピング尺度

今回教示文を育児用に変更したため、TAC-24 に対し探索的因子分析(最尤法, promax 回転)を行った。その結果、「F1: 問題回避コーピング」、「F2: 気晴らしコーピング」、「F3: 解決努力コーピング」の3因子20項目が確認された(Table 2)。信頼性を示す α 係数は.86～.74 であった。

育児感情・コーピングが育児肯定感情に及ぼす影響

育児否定感情と育児肯定感情の間に、コーピングを媒介することによって、育児肯定感情及び育児否定感情が変化するかを階層的重回帰分析によって検討した(Table 3)。step1 に育児否定感情を投入し、step2 では否定感情とコーピングを投入した。その結果、コーピングを介在させることによって、説明率が上昇した。また育児否定感情の育児肯定感情への影響が、コーピングを介在させることによって、減少していた。コーピングの種類別にみると、問題回避コーピングは育児肯定感情に対して負の影響を与えており、気晴らしコーピングと解決努力コーピングは育児肯定感情に対して正の影響を与えていた。

考 察

本研究では、育児に対して否定的な認知をした後、抑うつなどのストレス反応に至る前の、再評価の段階で、育児を肯定的に捉えるためのコーピングの検討を行った。分析の結果、全ての育児否定感情のもとで、育児肯定感情に否定的な影響を与えていたコーピングスタイルは、問題回避コーピングであった。問題回避コーピングが否定的な影響を与える理由についてはじめに考察を行う。つまり、問題を回避する場合、結果的には問題の解決にはなっていないため、否定的な認識の変容が生じず、育児への否定的な感情が低下せずに維持された可能性がある。また問題回避コーピング

を行う場合、効力感が低い傾向が示されている(Pierce et al, 1996 ; 島津, 2006)。そのため、問題回避コーピングを行う養育者の場合、効力感が低いため、育児に対しても無力感を持ち、育児肯定感情が高まらなかった可能性もある。つまり育児に対する効力感を高めることが、問題回避コーピングの発生を低減させることになると考えられる。また問題回避コーピングを取り続ける養育者の場合、ストレスが高まり最悪の場合、育児放棄につながる可能性もあるのではないだろうか。今後は育児に対する効力感の向上に寄与する要因の検討が求められる。

一方育児負担感が生じた場合、気晴らしコーピングと解決努力コーピングを行うことが、育児を肯定的に捉える助けとなっていた。育児に対して疲れてしまったと感じた場合、解決努力コーピングを行うことによって育児肯定感が上昇した理由を以下のように考える。つまり問題に取り組むことによって、自分は育児に関与しているという認識が高まり、育児肯定感が高まったのではない。育児肯定感情は、育児に関わる養育者に特徴的な感覚である(柏木・若松,1994)。つまり、育児に対して、育児に対する負担を感じた場合、その問題にあえて関与してみることが、育児肯定感の向上につながると考えられる。しかし育児に対してより深刻な負担感を感じている場合、そのように解決努力を行うだけではより負担感が増大する可能性もあるだろう。解決努力コーピングが適切に働くためには、ある程度養育者がストレッサーに対して、統制感を感じることも必要となるだろう。今後、養育者の育児に対する統制感や効力感を高めるための支援を考える必要があると考えられる。次に気晴らしコーピングが、育児肯定感情に正の影響を与えていた点について考察を行う。気晴らしコーピングは、先の問題回避コーピングではなく、情動に焦点を当てた回避コーピングであり、この場合、問題に対して持っている感情から一度距離を置くことによって、問題を客観視することができる。そのため、心に余裕ができ、育児に対する否定感情が低減されたと考えられる。加えて、出来事によって生じた「疲れた」という感情を発散し、今後も対処ができることと考えることによって、育児に対する肯定的感情が高まったと考えられる。

次に、育てへの不安を感じた場合、解決努力コーピングを行うことは、育児肯定感情に正の影響を与えていた。これは育て方に対して、自信が無い場合に、子育てに関する情報を収集するなどの対処を行うことによって、育児肯定感情が高まることを示している。自身の育て方に自信が持てない時に、積極的に情報を収集し、新しい知識や考え方を身につけることにより、現在の悩みを解消し、親として成長したという感覚を高めることができるためと考えられる。例えば、育児において完璧で無くてはならないという強迫的な信念を持った養育者が経験者から話を聞く過程を考える。この過程で、養育者がある程度の楽観性を持つことができるようになった場合、この養育者は、育児によって新しい考え方を身につけることができたとと言える。このように育て方という一般的に対処可能な問題に対しては、積極的に関わることによって、育児に対する肯定感情が高まることが示唆された。しかし、解決努力コーピングには、問題点もあると考えられる。つまり解決努力コーピングとして、情報収集を行っている養育者の場合、その情報と自身の子育てを無条件に比較し、育て方に対して一層不安を募らせることもあり得るのではない。例えば、発達障がいを持つ子どもの養育者などは、健常児の養育者の育て方を鵜呑みにすると、自身の育て方に不安を覚えることもあると考えられる。本研究では、健常児を持つ養育者を対象としたものの、今後は発達障がいなど

の障がいを持つ子どもの養育者の育て方への不安についても検討が必要となるだろう。

最後に育ち方への不安感について考察を行う。養育者が子どもの育ち方に不安を感じた場合、気晴らしコーピングを行うことが、育児肯定感の向上に寄与していた。育ちへの不安とは、自分の子どもが遅れているのではないかと心配になることであり、一般的には統制不可能な悩みであると考えられる。その理由は、育ちへの不安の場合、不安内容も子どもに起因するものであり、養育者の努力で対処ができる範囲も非常に限られているためである。このように統制不可能な悩みの場合、気持ちをそらせるというコーピングが、情報を収集しようとするコーピングよりも育児肯定感情に影響を与えていた。つまり Goodness of fit の考え方に基づき、その場面に応じた柔軟なコーピング、今回の場合気晴らしという、問題には直接対処しない行動が有用であった。

以上より、本研究において育児肯定感情にコーピングが与える影響について得られた成果としては次の点を挙げることができる。1 点目は、対処可能な問題に対しては、解決努力コーピングという問題に積極的に取り組もうとする対処を行うこと有用性が示された。2 点目は、対処不可能な悩みの場合には、その問題に直接対処するのではなく、その悩みによって生じた感情に対処することが有用であった。このようにストレス評価に応じて、用いるコーピングを変容させる柔軟性も必要となってくるだろう。

最後に本研究の限界点を述べる。本研究では、コーピングを子育て用という状況レベルのコーピングに変容したものの、養育者の認知の種類に応じて行うコーピングにはどのようなものがあるかについては検討ができていなかった。つまりより場面を限定し、認知とコーピングの対応関係の検討も必要となる。また本研究において、重要性が示唆されたコーピングの柔軟性という点についても今後検討が必要である。つまりコーピングが適さないと判断された時に、如何に適切にコーピングを変容させることができるか、またこの状況を自分がいかに統制できるかという統制可能性の視点も今後必要となるだろう。

引用文献

- 安藤智子・岩藤裕美・荒牧美佐子・無藤 隆(2006). 幼稚園児をもつ夫の帰宅時間と妻の育児不安の検討:子どもの数による比較. 小児保健研究, **65**, 771-779.
- 荒牧美佐子(2005). 育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から—. 小児保健研究, **64**, 737-744.
- 荒牧美佐子・無藤 隆(2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその規定要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に. 発達心理学研究, **19**, 87-97.
- 荒牧美佐子・田村 毅(2003). 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因—幼稚園児を持つ母親の場合—. 東京学芸大学紀要 6 部門, **55**, 83-93.
- Folkman, S., & Lazarus, R.S.(1988). Coping as a mediator of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 466-475.
- Folkman, S., Schaefer, C., & Lazarus, R.S.(1978). Cognitive processes as mediators of stress and coping. V. Hamilton, & D. M. Warburton (Ed.). Human stress and cognition (pp.265-298). Chichester, England:

Wiley.

- 間三千夫・筒井孝子・中嶋和夫(2002). 母親の育児ストレス・コーピングと精神的健康の関係. 信愛紀要, **42**, 54-58.
- 岩堂美智子・松島恭子(2001). コミュニティ臨床心理学-共同性の生涯発達. 大阪：創元社.
- 柏木恵子・若松素子(1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, **5**, 72-83.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二(1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成. 教育相談研究, **33**, 41-47.
- 金岡 緑・藤田大輔(2002). 乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に対する否定的感情の関連性. 厚生指標, **49**, 22-30.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S.(1984) 本明 寛・織田正美・春木 豊 (監訳, 1991). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究. 東京：実務教育出版.
- Penly, J. A., Tomaka, J., & Wiebe, J.S.(2002).The association of coping to physical and psychological health outcomes: A meta-analytic review. *Journal of Behavioral Medecine*, **25**, 551-603.
- Pierce, G. R., Sarason, I. G., & Sarason, B. R.(1996). Coping and social support. Zeidner, M., & Endler, S.N.(Ed.).Handbook of coping: Theory ,Research ,application. New York: Willey. (pp. 434-451)
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則(1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究, **64**, 409-416.
- 島津明人(2006). コーピングと健康. 小杉正太郎(編). ストレスと健康の心理学. 東京：朝倉書店.
- 菅野幸恵(2001). 母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ. 発達心理学研究, **12**, 12-23.
- 住田正樹(1999). 母子の育児不安と夫婦関係. 子ども社会研究, **5**, 3-20.
- 住田正樹・中田周作(1999). 父親の育児態度と母親の育児不安. 大学院教育学研究紀要, **2**, 19-38.
- Thomlison, B.(2004). 子どもへの不適切なかかわりーリスクと防御推進要因の視座. M. W. Fraser (Ed.) Risk & Resilience in childhood: An Ecological Perspective 2nd ed. national association of social workers, INC. Washington DC U.S.A. (門永朋子, 岩間伸之, 山縣文治 (2009). 子どものリスクとレジリエンス 子どもを力を活かす援助. 東京：ミネルヴァ書房.

謝辞

本研究は、著者が2011年3月に関西学院大学文学部に提出した卒業論文を再解析したものである。論文作成にあたり、ご指導いただきました関西学院大学の成田健一教授、研究室の皆々様、広島大学の福田哲也様には大変お世話になりました。また調査にご協力いただいた保護者の皆々様にも深く御礼を申し上げます。